〔東女医大誌　第60巻　第3号
頁　307～311　平成2年3月〕

学術情報

第8回　学内病理談話会

日　時：平成元年11月11日（土）午後1：00
会　場：東京女子医科大学　中央校舎1階会議室

開会の辞　武石　詢（第1病理）

座長　高山幹子（耳鼻咽喉科）

1. 猫泣き症候群の長期生存した1剖検例

金田良夫・付　強・河上牧夫・武石　詢（第1病理）
里見元義（心研）

2. 治療に苦労した副鼻腔真菌症の1例

山本信和・黒田令子・児玉　章・石井哲夫（耳鼻咽喉科）
平山　章（病院病理）

3. 硬化性胆管炎に特異な慢性膵炎を合併した症例の病理学的検討

藤林真理子（第二病院中央検査部）

座長　笠島　武（第2病理）

4. 心房性ナトリウム利尿ペプチド（ANP）の心内膜線維弾性症における免疫組織学的検討

西川俊郎・笠島　武（第2病理）
広江道昭（放射線科）
成瀬光栄・成瀬清子（第2内科）
中島祐司（心研）

5. 甲状腺乳頭癌由来 thyroglobulin に対する mouse monoclonal 抗体の免疫組織化学的検討

相羽元彦・平山　章（病院病理）
金地嘉春・藤本吉秀（内分泌外科）
日下部きよ子（放射線科）
佐藤幹二（内分泌内科）

6. 喉頭乳頭腫の1例

岡村玲子・高山幹子・石井哲夫・吉原俊雄（耳鼻咽喉科）
平山　章（病院病理）

座長　平山　章（病院病理）

7. Suprasellar epithelial cyst の1例

久保長生・内布英昭・村垣善浩・仁田仁恵・
荒　徹昭・加川瑞夫（脳神経センター外科）

8. Bellini 管腫瘍の1例

伊藤文夫・鬼塚史朗・柳沢　博・龍谷　修・
中村倫之助・中沢速和・東間　紘・太田和夫（腎センター・泌尿器科）

9. 長期間原発巣が不明であった転移性皮膚腫瘍の1例

森田久美・豊田裕之・川島　真・肥田野　信（皮膚科）
河上牧夫（第1病理）
雨森　明・田所洋行（消化器病センター内科）

座長　武石　詢（第1病理）

10. 卵巣悪性中胚葉性混合腫瘍3例の臨床病理的検討

島　由美子・滝沢　憲・佐藤美枝子・
古市郁子・井口登美子・武田佳彦（産婦人科）
平山　章（病院病理）

11. 動物の自然発生腫瘍　1. イヌの悪性黒色腫の1剖検例

金井孝夫・小山生子（実験動物中央施設）
伊藤弘一（ダクタリ動物病院文京病院）
西川俊郎・笠島　武（第2病理）

12. Human-T cell lymphotrophic virus type I (HTLV-I) associated myelopathy (HAM)の1剖検例

佐々木彰一・小森隆司・小林逸郎・竹宮敏子・丸山勝一（神経内科）
武石　詢（第1病理）

閉会の辞　豊田智里（第1病理）

1. 猫泣き症候群の長期生存した1剖検例

（第1病理）金田　良夫・付　　強・
河上　牧夫・武石　　詢
（心研小児科）里見　元義

症例は18歳8カ月と長期生存した女性患者で3カ月検診でCri du Chat syndromeとVSDと診断され3歳頃まで仔猫のような泣声であった．18歳8カ月で穿孔性胃潰瘍で腹膜炎を起こして死亡した．外見上，小頭症，小顎症，長頸，内眼角隔離，内眼角贅皮，眼列狭小，耳介低位，歯列不整，鳩胸等特有な顔貌を呈し，染色体検査では染色体数46，XX，del(5)(p^{13}-ter)であった．剖検の結果では常染色体異常に基づく一群の形成異常があり，特に喉頭の低形成(喉頭蓋が短く，喉頭蓋谷が狭い，後交連のslit状の間隙，輪状軟骨の形成不全と内腔への半月状膨隆，声帯が短くdiamond状に開いていた）を認め，これが発声の異常を惹起したものと思われた．直接死因となった胃潰瘍は胃体部に1.2×2.8cmの潰瘍と一部穿孔し，汎腹膜炎を併発していた．VSDは大動脈弁直下膜様部の2×2cmと大きく末期には右心不全徴候が前景に出ていた．本症の1剖検例について若干の文献的考察を加えた．

2. 治療に苦労した副鼻腔真菌症の1例

（耳鼻咽喉科）山本　信和・黒田　令子・
児玉　　章・石井　哲夫
（病院病理）平山　　章

一側副鼻腔陰影を示す患者の診察に際して考慮すべき疾患の1つに真菌症がある．今回は種々の治療にもかかわらず，徐々に進展した鼻副鼻腔真菌症（アスペルギルス症）の1症例を経験したため報告した．初診時右上顎洞～篩骨洞～眼窩内に真菌の進展を認めたため，摘出手術を行った．この時の病理所見では壊死物質のみならず組織内に侵入し，周囲に形質細胞・リンパ球浸潤，組織球の増生を伴う中に多量の真球を認めた．形態からはアスペルギルスが示唆されたが，これは培養検査で確認された．またPAS染色，Grocott染色を行い，真菌の形態の検討を行った．臨床的には再発を反復する毎に局所進展を示し，眼窩内に大量に侵入したため，拡大上顎全摘＋眼球摘出を施行し，真菌は制御され，患者は退院となった．しかし在宅中に脳梗塞を発症し，死亡した．

以上我々が治療に苦労した鼻副鼻腔真菌症の1症例を報告した．

3. 硬化性胆管炎に特異な慢性膵炎を合併した例の病理学的検討

（第二病院中央検査部）藤林真理子
（第二病院外科）菊池　友充・
熊沢　健一・梶原　哲郎

69歳の女性．黄疸を指摘され，腹部エコー，PTC造影などで下部胆管癌が疑われ，膵頭十二指腸切除術を施行された．

膵は，術中に頭体尾部全体の腫大が確認された．手術材料では，膵頭部は腫大し，Vater乳頭より約3.5cmにわたる総胆管の狭窄を認めた．

組織学的には，膵は実質の破壊を伴ったび漫性慢性膵炎を示した．浸潤細胞はリンパ球と形質細胞が主であった．膵管上皮の過形成や化生，蛋白栓は認めない．総胆管壁は，狭窄部のみならず非狭窄部も，炎症細胞浸潤を伴った線維性肥厚を示し，好酸球浸潤がかなり目立つ．組織像とPTC造影より硬化性胆管炎の合併を考えた．

本例は原因不明のび漫性慢性膵炎に硬化性胆管炎を合併した特異な例で，免疫異常が示唆される．Sjögren